


大学文書館へ 行こう

第5回
「同時代の資料に見るクラーク」

北海道大学大学文書館 井上 高聡



クラーク肖像 (大学文書館蔵)

札幌農学校開校に際して教頭として招聘を受けたウィリアム・スミス・クラーク（一八二六〜八六年）の契約期間は、一八七六年五月二十日から一年間です。実際に札幌農学校に着任していた期間はもっと短く、一八七六年七月三十一日から一八七七年四月十六日までの八ヶ月半に過ぎません。それだけに、クラークの在任時代の資料はさほど多いとは言えません。

学校運営者の顔

例えば、クラークが農学校や農学校を管理する開拓使に宛てた書簡は附属図書館が所蔵しています。クラークが発したり受け取ったりした文書は、大学文書館が所蔵する「札幌農学校簿

書」に含まれます。それらを探ると、農場の設置やその管理方法、植物園の意義、博物展示の必要性、図書館の充実と改良など、現在、北海道大学を特徴付けている基幹組織に関わる提案をし実施を取り付けています。重要文化財に指定されているモデルバーン（模範家畜房）や、札幌市時計台（旧札幌農学校演武場）の建設もクラークの提案によりまします。

この他にもカリキュラムや規則の制定、農場に植栽する品種の輸入、農場実習の実施、実験器具の購入、次年度入学生選抜方法、退任後の校務の分担や後任外国人教師の人事など、八ヶ月半の在任期間に、学校の基盤となる事項に細かく指示や提案をし協議をしています。

当時の資料は、クラークが学校運営の手腕にたいへん長けていたことを示しています。

教師としてのクラーク

一方、教師クラークに関する同時代の資料には、例えば、クラークの「植物学」の講義を記録した受講ノートがあります。第一期生佐藤昌介の受講ノート（大学文書館蔵）から講義内容が「Structural and Physiological Botany」（植物構造学・植物生理学）であったことが分かります。「英語」の講義では、クラークは英文の読み・書きだけではなく、演説術を重視しました。クラークの肝いりで、生徒たちは弁論技術を磨く「開識社」を結成し、その活動の内容は「開識社記録」（大学文書館蔵）から窺えます。

また、クラークは生徒ひとりひとりに自筆で名前を記入した聖書を与え、課外に聖書購読を行ないました。佐藤昌介旧蔵の



見返しにクラークの名前記入がある佐藤昌介旧蔵聖書 (大学文書館蔵)

聖書（大学文書館蔵）の見返しには、「SATO SHUNSUKE」とあります。花巻出身の佐藤が南部訛りで発音した名前の音を、そのまま表記したようです。

同時代のクラーク評

札幌農学校開校から三ヶ月後、一八七六年十一月二十六日付けで第一期生大島正義が兄正義に宛てた手紙を大学文書館が所蔵しています。「教員ウヰルヤム、エス、クラク君は過日も記載せし如く博学秀才にて数生輩ニ示すに種々の金言を以てし又深く耶穌教を信じ弊地の如きは長官公の希二由り固く禁ぜられしを此先生の高き説ニ黒田公も一啄をも入るゝ能ず其故今日ニ至りては置て問ざるニ及べり」と直截なクラーク評を記しています。博学なクラークが生徒に名文句でアドヴァイスをする、キリスト教信仰を禁止していた黒田清隆開拓長官を説き伏せて信仰を黙認させたとの内容です。

クラークに関しては、後年の回想や伝記、評論などを基に語られる場合が多いようです。さらに、クラークに心酔する後世の人々が、自身の理想をクラークの言動の中に読み込み、自身の思い入れを重ね合わせて論じています。それはクラークのスピノフ・ストーリーと言って良いと思います。そうしたスピ

ノオフの成立・浸透・定着の過程自体が北海道大学の歴史の一部を成している点は非常に面白いと思います。スピンの切れ味を確かめるためにも、同時代の資料を辿ることは重要です。



一八七六年十一月二十六日付け大島正義宛て大島正義書簡 (大学文書館蔵)